都市に浮かぶ幼稚園(3)

他園との交流を通して

足立　なぎさ

二年前の春。念願の幼稚園教師になれるということで、期待と不安の入り混じった気持ちでいました。勤務する幼稚園が決まり、園長先生と話をしていると、

「うちは、園児数が少ないんだよね」

と、言われました。

年少児が十一人、年長児が十二人。

園児数の減少が問題となっていることは、知っているつもりでしたが、実際に、自分が少人数の幼稚園に勤務するなんて、考えてもいませんでした。一学年に四クラスある大きな私立幼稚園に通っていた私は、今まで描いていた幼稚園のイメージと全く違うので、戸惑いましたが、主任の先生や、先輩の先生方に指導を頂きながらのスタートでした。

港区の園児数の減少は、年々深刻になっています。全園児数が二桁いれば、中規模園で、一桁の園児数の園のあるというのが現状です。

少人数園では、人数が少ない分、それだけ人との関わりが少ないということが、問題になります。そのため、港区の幼稚園では、クラス枠をはずして異

年齢と交流したり、地域の人と関わりを持ったり、近所の未就園児を園に招いて一緒に遊んだりするなど、様々なやり方で工夫をしています。他園との交流もその中のひとつで、多くの幼稚園で取り入れています。

私の南海幼稚園でも、園児が減り始めた頃から、いろいろな幼稚園と交流してきました。特に同じ位の園児数で、歩いて行き来できる距離にある芝幼稚園とは、継続的に交流をしてきました。

そこで、私が初めて担任した年少十一人の子ども達と、芝幼稚園との交流も始まりました。

◎交流の始まり

交流は、年長同士が中心となり、手紙のやりとりをしたりするので、年少だった最初の頃は、自分達から進んで芝幼稚園の友だちと関わる姿は、あまり見られませんでした。

芝幼稚園に遊びに行っても、自分達の幼稚園にない遊具やおもちゃを目敏く見つけると、すぐ勝手に、遊び始めていました。

逆に、芝幼稚園の子達が遊びに来た時は、お客様そっちのけで、普段のペースで遊び続けていました。

これも、年少の最初だからということで、無理に一緒に遊ぶようにはしませんでした。

しかし、せっかくの出会いの機会ですから、交流の際には、みんなで集まる時間を設けて顔を合わせました。そして、名前を教え合ったり、一緒に踊ったりしました。

直接的な関わりが少ないながらも、交流を繰り返すことで、芝幼稚園の友達の存在が、少しずつ子ども達の意識の中に入っていったのではないかと思います。

◎合同遠足から力レーパーティーへ

交流は、お互いの園を行き来するだけでなく、一

緒に遠足に行ったりもしました。

小石川植物園へ一緒に遠足に行く前日に、芝幼稚園の年少組から、初めて手紙が届きました。「遠足一緒に行きましょう。会えるのを楽しみにしています。」という内容でした。

「芝幼稚園って、覚えている？」と、聞くと、「覚えているー」「顔は覚えていない」などと、反応は様々でしたが、翌日は、芝幼稚園の子も一緒に行くんだ、会えるのだという期待を持てたようでした。

このように、交流の際、教師同士で連絡を取るだけでなく、子ども達にも意識づけるためにも、手紙のやりとりをしています。この時、手紙の果たす役割の大きさを実感しました。

遠足の当日、広い植物園の中で、走り回って探検したり、木に登ったり、薪を拾って集めたりしました。（薪を拾って帰り、園で火をおこし、カレーを作ることになっていました）

また、崖でも遊びました。かなりの斜面なのですが、木の根や枝につかまりながら登ると、今度はその斜面を滑り降ります。もうここでは、年齢・幼稚園など関係なく、みんなで遊んでいました。崖登りを身軽にこなすT君は、芝幼稚園の先生に、「うまいね」とほめられると、いつもと違う人にほめられて、より一層嬉しいようで、得意顔で何回もやっていました。

全身で思い切り遊んだ遠足。芝幼稚園と一緒だったから、楽しさも増します。

遠足の別れ際に、「また遊びたいね」と言う声があがりました。すると、「拾った薪でカレーを作る時、一緒にやろう」「自転車に乗せてあげよう」と、話がまとまり、カレーパーティーを一緒にやることになりました。もちろん、その場に居合わせた園長先生も、子ども達の盛り上がりに、喜んで承諾して下さいました。

今度は、招待の手紙を芝幼稚園に初めて書きまし

た。

「遠足楽しかったね」「自転車に乗らせてあげるよ」「カレー一緒に作ろうね」「また遊ぼうね」など、子ども達が言った言葉を、私が代筆しました。

カレーライスは、子ども達の大好物です。

材料は、子ども達が、家で相談して、好きな材料を一品ずつ持ち寄って、カレーを作ろうと、両園で相談しました。

又、ライスの方は、飯盒で挑戦することになりました。南海の年長と年少と芝の合同の五人組ができるようにくじをひき、八グループ作り、一人ずつ先生がつきました。そして、グループごとに、飯盒を一つずつ炊きました。

遠足で拾って来た薪で火をたき、自分達で持ち寄った材料で作ったカレーと飯盒で炊いたごはんでできたカレーライス。みんな、「おいしいね」を連発。食の細い子も、二杯、三杯と平らげていました。

今まで、交流をしても、関わりの少なかった年少ですが、遠足とカレーパーティーと、楽しい時を一緒に過ごしたことで、芝幼稚園に親しみがわいたようで、個人的に話しかけたり、関わりを持つ姿が見られました。

カレーを煮込んでいる間、芝幼稚園の友達が、自転車乗りを始めると、「どうぞ」と、自転車を貸してあげていました。そして、補助なし自転車の練習をしている子がいると、補助なしに乗れるようになったばかりのK君が、側に寄って行って、「僕もね。練習して乗れるようになったんだよ」と言いながら、その子を見守っていました。そして、少し乗れるようになると、「今、乗れたじゃん」と、声をかけたりしていました。

また、芝幼稚園が帰る時になると、握手をしたり、「またな」と、肩をたたき合ったりして、別れを惜しんでいました。そして、門の外、芝幼稚園の

友達が見えなくなるまで、手を振って見送っていました。

この日から、芝幼稚園のことを「芝ちゃん」と呼ぶようになりました。それだけ、親しみがわいてきたのだと思います。

◎年長になっての交流

年長になると、中心となって手紙のやりとりをして、芝ちゃんとの交流が続きます。

苺狩りに招待してもらったり、自転車乗りに来てもらったりして、お互いの幼稚園を行き来したり、一緒に遠足に行ったり、交流の方法は、前年と同じなのですが、子ども達の遊びの様子が変わってきました。

自由に遊んでいる中で、ある子がある遊具を見つけて遊び出すと、その遊具がきっかけとなって、両方の幼稚園の子達が自然に一緒に遊び始めるのです。その中で、言葉を交わしたり、じゃれ合ったりするようになります。お互いに、ひとりひとりの名前を覚えて、存在を意識し始めたようです。

また、みんなでゲームをして遊べるようになりました。芝ちゃんから、キックベースボールを教わっ

た時、何回かやっていくうちに、ルールを覚え、「今度は、芝対南海で試合をしよう」と、約束をする程、闘志を燃やしていました。ゲーム遊びは、人数が多い方が盛り上がります。新しいゲームを教えてもらい、遊びに幅が広がり、みんなで遊ぶ楽しさも知ることができ、交流をすることがよい刺激となります。

芝ちゃんから受けた刺激で一番大きかったのは、一緒にプール遊びをした時ではないかと思います。

「大きいプールがあるからおいで」と誘ってもらい、初めて小学校のプールに挑戦しました。初めてのことで、子ども達がどのような反応をするか心配でしたが、誰ひとりとして嫌がらず、全員が小学校のプールに入ってしまいました。少しも恐がらず、飛び込んだり、幼稚園のプールと同じように泳いだりしていました。これも、同じ年齢の芝ちゃん達が、平気で泳いだりもぐったりする姿を見て、刺激されたのだと思います。

年長になると刺激し合えるようになってきた交流ですが、交流の際、お互いにお土産を持っていったり、もらったりします。それは、園の花壇に咲いている花だったり、手作りのジャムだったり、かにやアゲハの幼虫だったり、様々です。

ちょうど年長の春、南海幼稚園で飼っているモルモットが次々と子どもを産み、九匹の大家族となってしまいました。これから、九匹全部飼い続けることは難しく、一匹しかいないから欲しいという芝ちゃんに、是非わけてあげたいと考えていました。

しかし、大人の思惑通りにはいかないもので、子ども達は、「あげるのはいやだ」と言います。私が色々説得しようとすると、子ども達も考えて、突然裏庭の池のおたまじゃくしをすくい始め、容器をいっぱいにして、「これお土産。だから、モルちゃんあげなくていいでしょ」と言うのです。

私も負けずに、あの手この手で説得し、やっと一匹あげることになりました。芝ちゃんは、とても喜

んでくれました。そして、後にそのモルモットの様子を、手紙や写真で知らせてくれました。「あげる」という気持ちになるまで大変でしたが、モルモットを通して、手紙のやりとりをして、またひとつ芝ちゃんとの関係が深まったように思います。

◎最後の交流　～お別れおでんパーティー～

手紙のやりとりをしたり、一緒に遊んだり、ゲームをしたり、一緒に遠足に行ったりして仲よくなった芝ちゃん達。卒園も近くなり、最後にもう一度会いたいと思い、おでんパーティーに招待することになり、みんなで、手紙をかきました。

「おでんパーティーをするからおいで。ドッジボールをしよう。サッカー勝負しよう。王様ドン一緒にしようね……」

このように、子ども達から出てきた言葉は、ほとんど「一緒に～しよう」ということなのです。年少の頃が嘘のように、最後の交流は、芝ちゃんと一緒にやりたいことがいっぱいになりました。

当日、持ち寄ったおでんの具を切って、お鍋に入れて味をつければ、後は味がしみ込むのを待つばかり。火の番は頼んで、年長は、まずサッカーの勝負をしました。

念願だった芝対南海の勝負は、一対一で仲良く引き分けとなりました。

次は、「王様ドン」というゲームを、みんなでやりました。芝ちゃんは初めてだったのですが、すぐにルールを覚えて、楽しんでいました。

そして更に、最後の交流にふさわしく、お互いに出し物を見せ合う発表会をしました。南海は、みんなで作った大型紙芝居を発表し、芝ちゃんは、合奏をしてくれました。発表する方が真剣だと、見る方はより一層体を乗り出して真剣になります。特に、芝ちゃんの合奏を南海の子達は、じっと聞き入っていました。

いっぱい遊んで、一生懸命頑張った後は、お待ち

かねのおでんです。寒空の下、たき火を囲んでおでんを食べて、体を温めました。

二年間の芝幼稚園との交流は、こうして幕を閉じました。

この交流の中で、芝ちゃんと関わり合い、楽しい時を一緒に過ごし、新しい友達の輪が広がったように思います。そして、その友達との関わりの中で、少人数で味わえないことも、経験することができました。

例えば、一緒にゲームをして遊ぶことで、大勢で遊ぶ楽しさを知りました。また、少人数だと忘れてしまいがちな、譲り合うということも、自転車やおもちゃを貸してあげる場面で見られました。更に、プールの例でも見られるように、初めてのことでも挑戦して出来てしまったり、新しいゲームを教えてもらったり、同年齢の友達から、たくさんの刺激を受けたことも良い経験となりました。

交流も一回だけだったら、こんなに深く、「芝ちゃん」と呼べる間柄にはならなかったと思います。繰り返し交流を続けることに、大きな意味があるのだと思います。子ども同士が、ひとりひとりの名前を覚えるだけでなく、繰り返して一緒に遊んだり関わり合う中で、「K君ってやさしいよ」「S君ってサッカーうまいんだって」と、ひとりひとりのことを知るようになるのです。

また、交流の際の手紙のやりとりも、交流を深いものにした一因だと思います。子ども達にとって、自分達あての手紙が届くということは、やはり嬉しいようで、興味を示し、親切感がわきます。手紙だけでなく、子ども同士自身が、電話でやりとりすることもありました。手紙や電話を利用することで、教師同士だけで打ち合わせて決めるのではなく、子どもにも、「今度は、芝ちゃんと～しよう」という期待を持って当日を迎えることができるのです。また、そうした気持ちが、当日の交流を意味あるものにしていくのだと思います。

子ども達だけでなく、私自身にとっても、得る所の多い交流でした。

先輩の先生方が、実際に保育している姿を見る機会というのは少ないのですが、交流をすると、その中で、「こういう関わり方もあるのだ」とか、「こういう方法もあるのだ」と、保育について発見があり、とても勉強になります。

また、交流の後で話し合いをする中で、同じ場面にいても気づいていないことがあることに気づくこともありました。更に、私の子どもの接し方について、アドバイスしてもらえるのも、とても嬉しいことですし、勉強になりました。

このような充実した交流ができるのは、子ども達以前に、教師同士のチームワークがよかったからだと思います。保育に対して、同じ願いを持ち、教師自身が交流をして楽しいと、感じられたということが、交流を継続し盛り上がっていった重要な要因なのだと思います。

全国的に、子どもの数が減り、園児数の減少は、ますます深刻になってくると思います。

「子ども全部で十七人なの」などと言うと、「えー、そんなのでやっていけるの」と、よく言われます。確かに、問題はあるかもしれませんが、他園との交流を初めとして、少人数だからできることは、たくさんあるということが、実際に保育をやってみて、少しずつわかってきました。

少人数のよさを生かした、少人数だから出来る保育が、できればと思っています。

これからもまだまだ試行錯誤ですが、子どもと一緒に、頑張りたいと思います。

（東京都港区立南海幼稚園）